

業のもつ宗教的意義

運命感は如何にして生れるか

業と運命は同じであるか。違いはあるか。

こうした問いは、しばしば出される問題である。この問いに答えるに先だつて明願にしておかなければならないことは「運命」という言葉の持つ意味である。一般には運命と言えば、何か一つの我等にとつて不可抗である力が我を離れて存在し、その力が我を左右し、支配するという考え、その力を運命だというのである。この一種の力が、私の生活とは何等の關係なく、偶然に働きかける、我等は唯、何時、どんな形で現われるかわからないこの力の前には、ただ服従することがあるばかりであるという運命論が、それについておこつて来る。我等の生活は先ずこの運命論に対して新らしく、鋭い批判のメスを与える所から始められなければならない。

人生の矛盾

先ず第一に考えなければならぬことは、運命観は何によりておこるかということである。それに対する答えは明確である。曰く、人生に存在する矛盾である。

我等の客観から働きかける全ての力が、もし我に対して喜ばしいものであるならば運命観はおこらないであろう。春が来て大地が桜花に荘嚴されるのを観て、誰が運命観をおこそうか。大海の波が逆巻いているのを見て、芸術的感情はある偉大を感じるであろう。けれども、その怒濤によつて一人の子供が死に至つた場合には、その親にとつては運命観をおこす素材となり得る。かく考える時、運命観は人生の矛盾に対する一種の解釈の仕方である。

人生の矛盾には様々な種類があろうけれども、その最大なるものは死である。死は人生の最大の悲劇だからである。「死は生きとし生ける者の運命である。」との言葉は、真に長い間、言いつづけられた言葉である。何が故に死を運命というのであろうか。生れた者が死ぬるといふことは、それは当然のことであり、生れた者が死ぬるといふことこそ正しいことである。それは運命ではなくて天地の相である。唯、人間は限りなく生きようとする意欲をもつ、その限りなく生きようとする願いと死とは矛盾する。ここに運命を観するのである。

すると運命観は、人生の矛盾に対する愚かなる解釈によつて生れることがわかる。即ち無智が生み出すのである。

業感縁起

運命観は、正しい智慧に立つていない。即ち我を支配する力を我以外に立ててその不可抗な仕草に盲従しようとする。その無自覚は、人間を解怠に追いやつたり、無気力にしたり、人生に対する正しい見方がないために、種々な嫌な生活がまきおこされる。その最も悪いことの一つは責任回避である。

ここに積尊は先ず我等を正しい人生及び自己の見方につれてゆこうとせられた。業の教えがそれである。けだし業の考え方は一切の責任を我の上に奪うのである。

業の思想は、徹頭徹尾、因果観の上に立つものである。因果とは詳しく言えば、因、縁、果である。ここにペンを持つ我は、久遠劫来の私自身の生活の果である。その果は、未来の生活の因である。果のままが困である。因のままが果である。その因は、因に相応する縁をひきよせ、又は、つくっている。因に縁がはたらきかけて次の果を生むのである。この因、縁、果の一如の相こそ我でなくてはならない。天地のあらゆるものが全て因果律以外には出ていない。一切が因果律によって動いている。

この思想を仏教では「業感縁起」とよばれるが、我々の心身も、その客観的世界も、すべて日々夜々に作す所の作業によつて発現れるのである。俱舎論には、「有情世間及び器世間に各多くの差別あり、是の如き差別は、誰に由りて生ずるや。」と問い、「世の別は業に由りて生ず」と答えられている。

即ち我自らも、我をとりまく世界も、業力によつて生じ、それによつて差別の宇宙万有を生じ、衆生を生じて、連続無窮に一つの流れとして転廻されてゆくのであると説くのである。

更に業の体を説いて、
「思及び思の所作なり、思は即ち意業なり、所作は謂く身と語なり。」と言われている。

思とは心のはたらきである。その精神活動が所作となつて出たのが身業と口業である。これを合せて、身業、口業、意業の三業と名づけるのである。この身口意の三業が、我等の未来をつくる力となり一切の境遇を生む力となるのである。

2

その役割

ここに注意しなくてはならぬことは業の思想は、ただ単に、我及び人生をただ客観的にながめて、これを説明する論理ではなくて、自覚の世界において感ぜられる体験の事実であり、その論理であることである。だから「業感縁起」とよばれるのである。一切の苦悩、一切の矛盾、その他の我及び私の境遇等を、我自らの責任と感ぜしめ、やがて、我自らの真相を発見せしむるものである。業感縁起が、人生を説く唯一の方法でもなく、その全てでもない。仏教には、更に頼耶縁起論、真如縁起論、法界縁起論等があるけれども、自覚の過程として、又その自覚の根底において、業感縁起は重大なる役目をはたすものである。

随順

我等は、天地に反逆し、社会人生に反逆し、一切の人に反逆し、我自らにすら反逆する。ここに一切と対立して、我を抽象して、一切のものの彼方に独り孤立せしめる。

我等の生活が正しい態度におかれる時、いわゆる人生に対する随順の相となる。随順とは、対立を超えて一体となることである。家と我との対立がなくなる時、家の一切は私の一切である。人生、宇宙に随順する時、人生と我と一体である。かかる一体の天地においては、如何に苦悩がおしよせようとも、逃げるに逃げる所なく、去るに

去る所なく、責任の一切を誰にも持つてゆきようがない。我等は内に業を感じることによつて、かかる随順の世界につれてかえられるのである。

業と智慧

業は一体何によつて生ずるか、その根本をなすものは無明である。無明とは智慧の光を失つた暗黒を意味するもので、又「惑」とよばれる。この惑より業をおこし、その果報として苦がある。故に惑業苦という。苦を避けんとして更に惑がおこり、より深い業を造り、業によつて苦に至る。我等の一切は、惑業苦以外の何ものでもない。惑業苦は価値ならざるものであり、否定さるべきものである。即ち迷いの事実である。しかし、かかる自覚、惑業苦を迷いの事実として感得するためには、そこに、それを照破する光がなくてはならない。この光こそ智慧である。智慧光の照破によつてのみ、我等は内に業を厭うべきものとして感得するのである。

積尊はすでに、この智慧光によつて、一切衆生の流転する相を十二因縁(惑業苦)として感得せられて、それによつて一切の迷いを超えて、解脱して涅槃を得られたのである。であるから業を感じずることは唯、智慧光によつてのみ可能である。智慧はそれ自身、真如より流れ来るものである。凡夫の所有ではなくて、如来それ自身のものである。この如来の智慧光が我等の内に輝く時、そこに業の流を体感せしめるのである。

超越

かくして如来の智慧光によつて業を知るとは一体如何なることであろうか。それは即ち、業そのものが何であるかを知るのである。業を知るとは、我において一切衆生を知り、人生を知るのである。迷いの事実を事実として知るのである。

然れば、知るとは何であるか。真実に知るとは解脱することである。超越することである。親鸞聖人が、

「念仏者は無碍の一道なり……：罪悪も業報を感じることあたはず。」

とは、業報よりよく超越せる者の叫びでなければならぬ。業感縁起論の使命がそこにある。業を真に知るとは業を超越することである。業を超越してのみ、業を業と知るのである。業におつて、しかも業を業と知り、それを超越することは、業の力ではない。それはただ智慧によつてのみ、なされるのである。

智慧によつて業を超えるとは、言いかえると真に業に随順することである。随順するもののみ、よく超えるのである。苦悩への随順であり、矛盾の超克である。

もし、業の思想を、かかる智慧光の体内においてなされる自覚反省の事実であり、随順と超越との風光を忘れて、唯単に人生や我を説明する説明の仕方とするならば、我等は又、宿作外道の迷妄に堕ちて、長く真実生活を失うであろう。宿作外道とは、我等の生活の全ては、前生に播いた種が生えたので、如何なる精進も努力も役立たないという宿命論である。仏教の業思想は、決してかかる宿命論、運命論ではない。一切のものみなが、因果の報いであり、あらわれであることを知る時、そこに唯、精進努力せなければならぬという大勇猛心が油然として湧くと共に、よく一切を背負つて立ち、無願三昧の念仏道に帰するのである。

念仏道

然るに聖人の告白を聞けば、しばく、善悪の一切が、宿業にあらずということなし、とのみ教にふれる。これは如何に考うべきであろうか。この聖人の体験のみ言葉がしばく誤まれて、真宗教徒をして宿作外道にしまった。

一体我等が、自らを廃悪修善に高めようとしたり、心の波を静めようとするれば、必ず、そこにそれと反する自己を見なければならぬ。その時にあたつて、我と我ながら、恐るべき力が内心に動いて、心の思うままに善行を執持させてはくれない。この内省の世界に感ずる反道義の力こそ、業と感ぜられるものである。しかもそれは、他よりこれを運び入れたものでなく、借りたものでもなく、我自ら我に反逆する力である。そこに我の宿業を感ずるのである。宿作外道の運命観とは根本的に異っている。少くともそこには高い道念が動いている。正しい価値の認識がある。この業力を感ずればこそ、ここに自覚反省の極致において、自力をはなれて、仏力に帰するのである。仏の智慧に帰するが故に、いよくこの業力を明らかに知り、仏力によつて撰取されて、一切を抱いて合掌するのである。

されば正しい念仏行者は決して、一切の責任を他に転嫁しようとはせぬ。ありのままの世界を発見しつつ業道を蹴破つて如来に立ち上つてゆくのである。そこには、運命観もなければ、あきらめも、妥協も、逃避もない。唯如来に生きる道一つが業報の中に恵まれる。業報の一切は念仏道の中に撰取されて、仏の一切の生きる舞台となるのである。不断煩惱得涅槃の世界がそれである。